

# 5. 「身近な自然はまるでホームセンター?!」の巻

## 生活資材・トップ 5



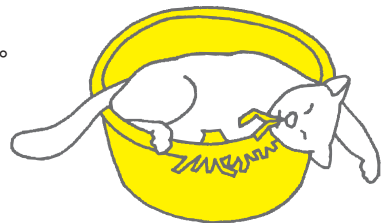
### 「昔」、タケの「かご」や「ざる」は入れ物として必需品

昔は、タケで生活や農作業に必要なものを作っていました。さまざまな用途の「かご」や「ざる」を編むほか、ほうき、垣根、桶のタガなどへの利用があげられました。スギは、家や樽の材料となり、皮は屋根を葺き、葉は焚きつけの燃料に使われていました。このほかにもタケやスギは刈り取ったイネを干すオダの支柱にも使われました。ヨシは葺ずや萱葺き屋根に、イネはわらとして縄や俵、草履を作りました。

ヤマザクラやシラカシは鉋や鎌、鉋などの柄に使われていました。グラフの集計には入っていませんが、川や海の岸辺に流れついた流木を拾い集めて焚き木にしたり、海草・海藻・水草を畑の肥料に利用していたとの報告もありました。

この項目で唯一、動物であがったツツナミガイ(海でくらすアメフラシの仲間)が出す紫色の体液は染料として利用したそうです。

「マタタビのつるでかごを作り、さまざまな物入れとして利用していたが、猫がそれをかじっていたという話はめずらしくなかった」といったエピソードもありました。



### 「今」は民芸やクラフト、野外活動での利用

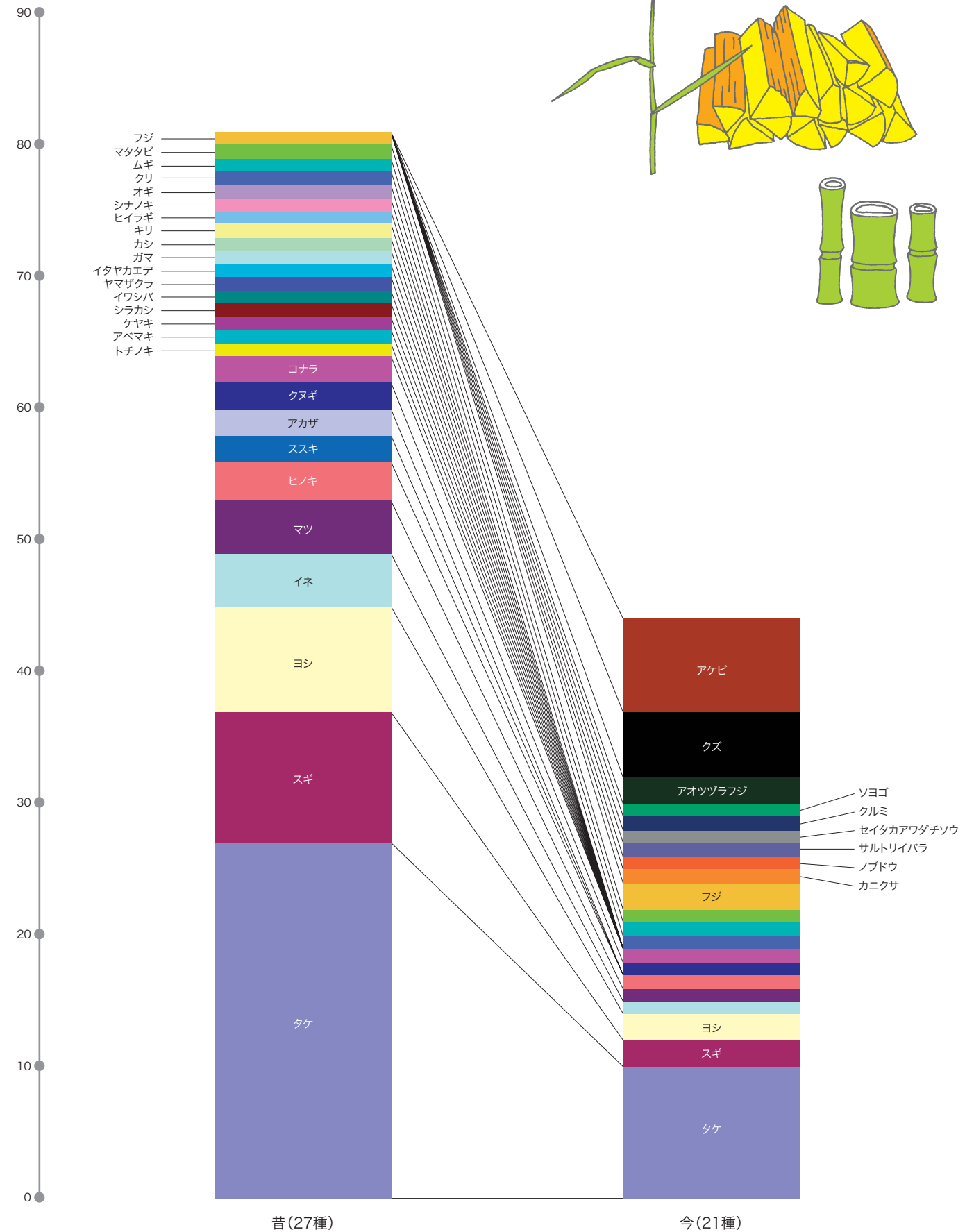
今もタケの利用がトップでしたが、その内容は大きく変わっていました。趣味の竹細工や子どもたちとの活動で竹馬や竹どんぼを作るといったものでした。

昔はあがっていなかったアケビ、クズ、フジ、アオツツラフジは、つるでクリスマスリースやかごを編むのによく利用されています。流木も燃料ではなく、飾り物や彫刻の材料に、クルミや

クリは草木染めにというように、クラフト利用が多くあげられました。

間伐材での炭焼きや薪でキャンプといった野外活動での利用もあがりました。イネ、ヨシのわらでのしめ縄づくりは、今でもみられる数少ない昔ながらの利用です。

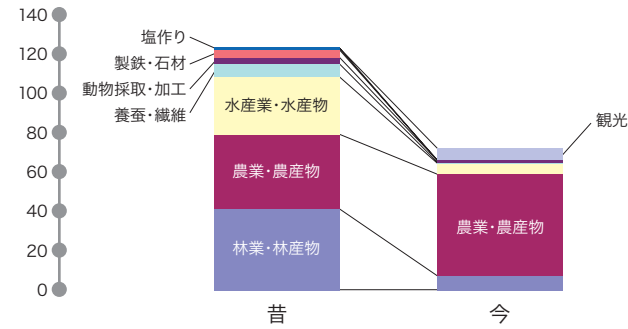
◎材料・道具に使われる植物の報告数



## 6. 「地域の自然を利用した産業」の巻

自然と関わりの深い第一次産業。

今回の調査では農業が増えていたのに対し、林業と水産業がどちらも約1/6に激減していました。昔はなかったのに、新しくあげられた産業は観光業で、その内容は釣り、エコツアー、遊覧船、スキューバダイビングなどでした。



### 多様な産物を生む小規模の加工業と商い(昔)

現在は、竹林の拡大が問題となっていますが、かつては「竹林はタケノコのほか、タケの材をカキいかなで製塩用など多用途に使われ、収益も多く大切にされていた」(香川)とあるように、「かご」などの日常生活用品だけでなく、他の産業にも活用されていたことがわかりました。

林業・林産物の中には、「マツの枯れ枝、松葉を集めて生計を立てていた」(福井)、「山に生えるシキミやサカキを取って東京へ出荷していた」(千葉)、「薪を燃料とした陶磁器作り」(愛知)など、小規模でさまざまな経済活動が見られました。

ほかにも農業と関係して「水田でドジョウをとり売った」(三重)、「ため池でコイを養殖していた」(群馬)との報告がありました。水産業では、かつては川魚の漁で生計を立てていたことが多くありました。

動物を利用した産業では、マムシとりのほか、「狩猟が盛んでカモが駅前に並べられて売られていた」(鳥取)、「イタチがたくさんとれ毛皮を売る人もたくさんいた」(北海道)等がありました。

また、水車を利用した粉引き、油絞りとといった産業も各地から報告されました。

### 新しい産業への試行錯誤(今)

現在は、数は少ないですが、ヤマノイモ(自然薯)の報告が目立ち、「道の駅にヤマノイモのむかごやマタタビなど自然に収穫できるものが盛んに販売されている」「産直野菜を売って

いる」といった自然食や新たに価値付けされた農産物の流通を反映したものや、エコツアー、里山の保全活動の一環としての炭作りなど、新しい産業としての試行があげられました。

## 7. 「子どもの遊びと仕事」の巻

身近な自然の中で子どもたちの遊び、仕事で最も多かったのは、今も昔も生き物をとって遊ぶことでした。「昔」は、次いで川遊びが多く、以下、農作業、薪で風呂焚き、薪集め、家畜の世話、水汲みなど、家の手伝いの仕事上位にあげられました。

「今」では、川遊びは全くなくなり、仕事は農作業の手伝いがわずかにあっただけ、それ以外の子どもの仕事は全くみられなくなっていました。

「昔」はなくて、「今」ある遊びは、バードウォッチングと環境学習の一環としての野外での遊びでした。子どもの遊びや仕事の種類は「今」はかつての1/3に激減しました。

### 地域の自然の中の生き物とり

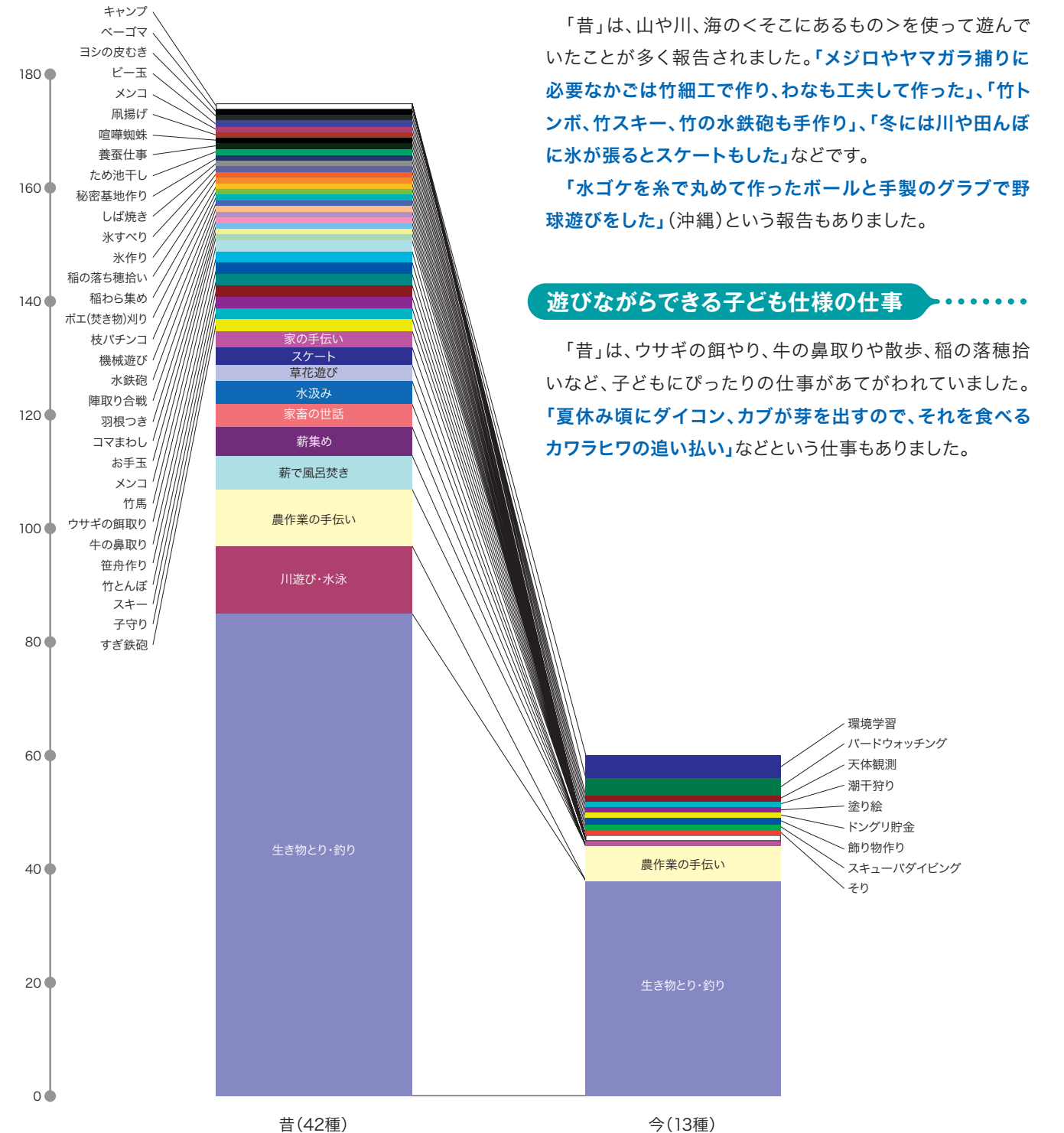
子どもの遊び相手となって、よく捕まえられたのは、「昔」はウナギ・フナ・ドジョウ・ハヤといった川や池の魚が圧倒的に多く、次いでカブトムシ、クワガタ、イナゴなどの昆虫でした。カブトムシとクワガタは今のほうが多くあげられました。

「今」は法律(鳥獣保護法)で規制されていますが、かつては、

メジロやスズメ、ヤマガラ、シジュウカラ、ホオジロ、コジュケイ、マヒワなどの野鳥を捕まえて遊ぶこともよくみられました。やはり遊び相手としては動物が多くあげられ、植物はアケビ、クリなど少数でした。



### ◎自然の中での子どもの遊びと仕事



### 手づくりの遊び

「昔」は、山や川、海のくそこにあるもの>を使って遊んでいたことが多く報告されました。「メジロやヤマガラ捕りに必要なかごは竹細工で作り、わなも工夫して作った」、「竹トンプ、竹スキー、竹の水鉄砲も手作り」、「冬には川や田んぼに氷が張るとスケートもした」などです。

「水ゴケを糸で丸めて作ったボールと手製のグラブで野球遊びをした」(沖縄)という報告もありました。

### 遊びながらできる子ども仕様の仕事

「昔」は、ウサギの餌やり、牛の鼻取りや散歩、稲の落穂拾いなど、子どもにぴったりの仕事があてがわれていました。「夏休み頃にダイコン、カブが芽を出すので、それを食べるカワラヒワの追い払い」などという仕事もありました。